2008・2009年度教研研究テーマ
歴史を創る担い手になろう
―キリスト教学校の過去・現在・将来を見据えて―

キリスト教学校教育 10

http://www.k-doumei.or.jp/　E-mail info@k-doumei.or.jp

発行者
キリスト教学校教育同盟
〒169－0051 東京都新宿区西早稲田2－3－18－72
日本キリスト教会館
電話 03（3203）0361
ＦＡＸ 03（3203）0362
理事長 野本 真也
編集人 鈴木 齊
（毎月1回15日発行）

第52回学校代表者協議会

11月14日(土) 玉川聖学院で

主題

創立百年を前に キリスト教学校の現状を考える

第52回学校代表者協議会は、来る11月14日(土)午前10時から午後3時30分まで、学校法人玉川聖学院（東京都世田谷区奥沢7―11―22）において開催される。

今回の主題は「創立百年を前にキリスト教学校の現状を考える」で、来年（2010年）教育同盟は100周年を迎える。

安田信人（大阪女学院高等学校）、堀岡啓信（北陸学院中学校・高等学校）の各氏、全体協議会の指定討論者は湊晶子（東京女子大学）、磯貝曉成（関西学院初等部）の各氏である。また、同盟百周年記念事業についても説明がなされる予定である。

理事長、院長・園長、学長、校長等学校運営に責任を持つ方々の参加を願っている。

玉川聖学院

玉川聖学院（玉川聖学院中等部・高等部）

1950年（昭和25年）、米国神の教会のミッションスクールとして創立。以来一貫してキリスト教主義に基づく人格教育を目指し、「神に対しては信仰 事に対しては希望 人に対しては愛」を教育理念とした。1990年に中等部480名、高等部600名に定員を変更し、中・高一貫教育による総合科目に象徴される柔軟なカリキュラムをもって、その成果を実らせている。2002年に校舎の全面改築を行い、04年に完成、充実した施設設備を整えて新しい時代を迎えた。

加盟校動静

ルーテル学院

創立100周年を迎え、記念式典が9月23日(祝)に三鷹市公会堂で執り行われ、同盟から野本真也理事長（同志社理事長）が祝辞を述べた。

遵愛学院

創基135周年を迎え、記念式典が9月26日(土)に遵愛女子中学校・高等学校大体育館で執り行われた。

佐藤利吉氏（前山形学院理事長）

7月20日逝去、99歳。学院葬が9月5日に山形学院高等学校チャペルで執り行われた。謹んで哀悼の意を表します。

霊も魂も体も

出村 彰

キリスト教学校に奉職してから、いつの間にか半世紀の歳月を閲することになった。戦後の弱乏期から現在の豊かさへ、それを試すかのようなキリスト教諸学校の存亡を賭けたこの時期へ、しかも、よりにもよって、同盟結成百年を祝おうというこの時期に……。宗教改革者カルヴァンの常套句を借りるならば「神の見えざる摂理の手」の導きを祈るや、切なるものがある。

パウロの最初期の書簡の1つとされるテサロニケの信徒への手紙一5章23節において、使徒は、平和の神御自身が、私たちの「霊も魂も体も何ひとつ欠けたところのないものとして」守ってくださるようにと祈る。人間の在り方・生き方を、霊・魂・体の3つに分けるのは、あるいはギリシア思想の遠い反響かとも思えるが、実は旧約の詩編にも（16編9節）「わたしの心は喜び、魂は躍ります。からだは安心して憩います」とあるので、もっと広い区分法と言えまいか。ついでながら、カルヴァンは霊・魂・体を、知性・心情・肉体と言い換えている。

聖書を礎とした教育を標榜する私たちにとって、実に示唆に富む配列ではないかと目ごろ感じている。順番は別としても、学校であるからには、知性の錬磨・知識の習得・学問研究の深化は、言うまでもないところであろう。最初期の先覚者たちに、その点でいささかの怠りもなかったことは、目下進捗中の同盟『百年史』も明らかにするところである。しかもなお問われる、私たち自身、また私たちに託されている、幼く・若い魂の「心が喜んで」いるだろうか、と。この喜びの根拠がどこに置かれているだろうか、とも。

さらに、体は確かに魂あるいは心の容器ではあるが、この土（塵）の器には「命の息」が吹き入れられている（創世記2章5節）。ほんの一例にすぎないが、嬉しいことに同盟校の仲間には、甲子園の常連までも含まれている。しかも、私たちはそれらによって、「からだが安心して憩う」配慮を十分にしているだろうか。それは単に個々人の肉体だけの問題ではないだろう。「からだ」とは、教育共同体としての構成・組織・制度・その運用、絶えざる自己刷新の努力、健全で確固とした財的基盤などのすべてが含まれそうである。

言うべくして易く、為すは容易なことではない。だからこそ、祈りなのだろう。使徒パウロは、この「全く聖で、非の打ちどころのない者となる」ことを神の恵みに帰し、しかも「イエス・キリストの来臨の時に」、と世界史を超えた次元へとまなざしを投げている。それはただ、遠い彼岸へのはかない願望投射ではなく、もしも永遠が常に現在へと差し掛けられているとすれば、いつでも・どこでも・だれにとってでも、切願・祈念となっても不思議ではないはずである。プロテスタント宣教師先人の（ただし秘やかな）来日150年、カルヴァン生誕500年、カトリック教会では聖パウロ生誕2千年、また同盟創設100年記念を1年後に待つ今秋、この祈りに合わせられたいと願ってやまない。

〈宮城学院理事長、同盟『百年史』編纂委員会担当常任理事〉

＜10月号目次＞
▶第79回夏期研究集会 〈2・3面〉
▶第53回事務職員夏期学校 〈4・5面〉
▶各地区夏期行事 〈6・7面〉
▶全国広報委員会 〈8面〉
▶キリスト教Q＆A 〈〃〉
▶キリスト教文化学会 〈〃〉
▶図書案内、公募、報告と予定 〈〃〉

聖書のことば

江藤直純

「愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」（ヨハネの手紙一4・11）

私の奉職する大学のスクールモットーは「一人ひとりを大切に」だと思われている。しかし、これは正確には事の半分しか伝えていない。マスプロ教育に背を向け、一把一絡げは邪道だと思い、経営は苦しくとも、少人数教育こそ私たちの使命だと信じてやってきた者として、今の時代に「一人ひとりを大切に」はまさに目指すべき教育だと強く認識している。

学生たちはみな個性も背景も条件も違うし、異なる課題を抱えている。とくに現代のように、自分は大切で、かけがえのない存在だと自信をもって言えない若者が多い時代にはなおのこと「一人ひとりを大切に」は必須である。

しかし、自分が大切にされることを求め、そこに安住する人間を育てることが教育ではない。内的安らぎを得るところ止まりの受け身の人間を育てることに終わってはいけない。そこから一歩踏み出してほしいのだ。

わたしたちはずっとこう確信してきた、「一人ひとりを大切にすることから、一人ひとりを大切にする人間が育つ」と。大切にされた人間だけが人を大切にすることができるようになる。

最初期の和訳聖書は神の愛を「才大切ニ」と訳している。このことは興味深い。神の愛は情緒的に好きだということだけではない。その全存在を無条件に重んじ、人間の尊厳を尊び、それゆえに生活の質も保持されるように努めなければならない。そのために奉仕する専門職を養成するだけでなく、将来何の職業に就こうとも、他者との関わりに生きる人を育てるキリスト教学校は「一人ひとりを大切にしたい」、そしてそこから「一人ひとりを大切にする人に育ってもらいたい」。

聖書ははっきりと伝えている。あなたは神に「愛された」のだから、「互いに愛し合いなさい」と。

〈日本ルーテル神学校校長・ルーテル学院大学教授〉

キリスト教学校教育同盟
創立百周年記念ロゴマーク募集

目的	同盟創立百周年（2010年）を記念するものとして各種の行事・文書等に使用します。
デザインの条件	未発表のもの。モノクロ（単色）。 同盟の英文名称の略称ＡＣＳＪ（Association of Christian Schools in Japan）、100th（年）を含ませる。 作品についての簡単な説明を添えてください。 採用作品は必要に応じて修正・改変することがあります。
使用権	キリスト教学校教育同盟に帰属します。
応募資格	同盟加盟校の教職員、学生・生徒、卒業生。 但しデザイン等を職業とされる方はご遠慮ください。
応募締切	11月30日（月）必着
提出先	キリスト教学校教育同盟事務局へ郵送してください。 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-72
審査	同盟理事会が選任した審査員によります。
発表	本紙紙上で発表の予定です。
表彰	入賞作品には賞金50,000円を贈ります。

第79回夏期研究集会

主題＝「これまでの100年、これからの100年」
日時＝7月27日～29日
会場＝御殿場・東山荘
会長＝森島牧人氏（同盟常任理事、関東学院学院長）
主題講演要旨・礼拝説教は9月号をご覧ください。

3日間のまとめ

山べにむかいて われ 目をあぐ

まだ梅雨明けぬ小雨の中、御殿場東山荘にて今年も夏期研究集会は幕を開けた。第1日目2時半の受付が開始するや全国から72名の同盟校の教員が東山荘本館講堂に会した。クリスチャンとノンクリスチャンが半数ずつ、中高の教員と大学の教員が半数ずつといったバランスのとれた集会となった。

開会礼拝、森島会長挨拶の後、全参加者が誕生日順に並んで輪を作り他己紹介により皆の緊張感も解れ、アイスブレイクは大成功。その後オリエンテーション、写真撮影が行われ、漸くチェックイン。この日のメインプログラム「分科会Ⅰ」は夕食後19時よりスタートした。「キリスト教学校の特色ある教育」というテーマのもと、6グループに分かれ、教育現場での①礼拝②キリスト教活動③ボランティア活動④平和教育⑤人権教育⑥国際理念に即し、キリスト教学校だからできる教育活動について活発で忌憚のない意見が交換された。

この日、夜中は暴風雨。

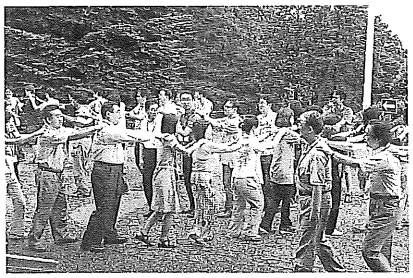
昨夜の風が嘘のような太陽の光が眩しい清々しい朝で第2日目を迎えた。ゲーム感覚の体操で今日のスケジュールが開始となった。朝拝、朝食後、9時半より森島牧人氏（同盟常任理事・関東学院学院長）による「主題講演」が催された。

「歴史の検証　伝統の継承」というテーマで、関東学院の校訓「人になれ　奉仕せよ」をもとに展開されているタイにおける「国際サービスラーニング」が紹介された。森島氏は関東学院創立当時の理念と照らし合わせながら異文化理解と地域貢献活動（体験活動）を学院の建学精神の基礎とするものであることを確認し、これからも継承していかなければならない「関東学院のセツルメント」であることを強調した。質疑の後11時より8分団に分かれ、主題講演に関する意見が交わされた。各キリスト教学校の現状と関東学院との比較を通じ、キリスト教学校としての奉仕の精神とは何かを問答することとなった。昼食後、「分科会Ⅱ」では「キリスト教学校の直面する課題」というテーマで7グループに分かれ話し合いが行われた。建学の精神から国家・行政との関わり、保護者や生徒・学生との対応に関する実情を報告し合いながら、それぞれの学校や生徒・学生が抱えている深刻で繊細な問題点を真摯に捉え、教員としての役割の具現化を討論するものとなり、意見は白熱した。15時からのフリータイムでは心配されていたソフトボールも無事プレーボールとなり、温泉やアウトレットモール訪問も難儀なく実行の運びとなった。夕食後の佐々木姉弟（レインボーミュージックジャパン）によるコンサートは憩いの時間として優雅な夢の世界へと誘ってくれた。夕拝の後、2日目のプログラムも終了である。

いよいよ第3日目、最終日である。チェックアウトの後、9時40分よりグループ・シェアリングが行われ、前日までの数々の論点を振り返り、改めてキリスト教学校として、これからの歩むべき道を確認することとなった。ついに、最終プログラム「全体会」を迎えた。「主題講演」に関する各分団からの質問に対しての森島氏の返答が中心となった。質疑応答は恙無く終了。11時40分より閉会礼拝が行われ、すべてのプログラムが終わった。帰路も小雨に見舞われ、富士山は望めなかったが、皆は「見えないものに目を注ぐ」が如く、「山べにむかいてわれ目をあぐ」の心境を共有していた。

山崎有介
〈長崎ウエスレヤン大学教授〉

夏期研究集会に参加して



「同じ想い」で

東畑由香理

北星学園に赴任して10年目を迎え、初めて同盟研究集会に参加させていただきました。

礼拝、基調講演、分団、分科会などさまざまなプログラムを通して、「キリスト教学校」の歴史をはじめ、そこに息づく「変わらないもの」を感じ取ることができたように思います。

基調講演では、キリスト教学校の歴史、特に、自校史を学ぶことの大切さに気づかされました。120年以上の歴史を持つ北星学園の歴史を振り返り、これまで受け継がれてきた良き伝統をこれからの100年に伝えていく。その100年へのステップを築く一員であることに責任の重さを実感しました。一方で、新たなものを創り出す、そのような機会が与えられていることに喜びも感じています。

分科会や分団では、多くの先生方と交流することができました。印象深いのは「平和教育」をテーマにした分科会でした。小学校から大学までのさまざまな実践例を通して、学校としての姿勢、担当者の悩み・喜び、子どもたちの成長の様子……などをお聞きすることができました。私たち〈北星学園〉が取り組んできたこれまでの教育を振り返るきっかけになったと感じています。今後、平和教育に関わるさまざまなプログラムを構築する上で、大変参考になる内容でした。

2泊3日という限られた時間でしたが、キリスト教学校の教師として、「同じ想い」を持った方々と交流することができたことに感謝いたします。

〈北星学園大学附属高等学校教諭〉

多くの交わりを通して

国分道雄

私はキリスト教学校教育同盟の研修会に、今回初めて参加させていただきました。今回の研究集会では、従来の分団討議だけでなく、初めての試みとして2回の分科会が設定されていました。

分団討議は、10名程度ずつのグループに分かれて、森島先生の主題講演をめぐっての討議を行いました。小・中高・大学の校種別に分団が組まれているので、私が参加したのは短大・大学の教員による分団でした。討議の最初に、自己紹介を兼ねて各校の状況の紹介がありましたが、同じキリスト教学校といっても「建学の精神」が明確になっていないため、そこから始めなければならない」「校訓に『自由主義』はあるが『奉仕』は無いため難しい」等、状況が様々であることを知ることができました。

分科会では、事前に登録したテーマ毎に分かれて、意見交換を行いました。

分科会Ⅰで、私は「人権教育」のテーマに参加し、そこでは「学習障害」「カウンセリング」「セクシャルマイノリティ」等の話題について、各校の状況が語られました。

分科会Ⅱでは、「生徒指導をめぐって」というテーマで、「キリスト教／非キリスト教学校の生活指導の違いはあるか」「携帯電話」「学習支援」等の話題について、各学

アンケートから＆見る夏期研究集会

1　主題について

★たいへん興味深いテーマだった。★教育同盟の歴史をもっと知りたかった。★時に叶っている。★キリスト教学校の歴史を学ぶことの大切さを再認識した。★もう少し焦点を絞るべき。★「これからの100年」を自分の中で議論を深められなかった。★自分の決意も新たにできた。★会を通して意識する機会が少なかった。★我々は何を目的に歩んでいくのかを考えさせられた。★我々が今歴史を繋げていく役を与えられていることの責任を感じた。★教育にどのようにキリスト教精神を伝えていくのかを考えさせられた。★自校史も見直しが重要である。

2　主題講演（森島牧人氏）について

★タイへの支援が小学校から大学まで連携しているのがすばらしい。★キリスト教の教学理念の具体化としての実践報告と歴史を踏まえた今後の拠って立つところ、持つべきビジョンを非常に分かりやすく話していただいた。★後半の「後継者の養成」を聞きたかった。★キリスト教学校やそこに所属するものとしての心構えなどのヒントになった。★サービスラーニングの活動と学校全体のキリスト教教育がどう結びついているのか見えてこなかった。★今を生きる私も歴史になるという考え方が新鮮だった。★知識と知恵の両方を養成していくことの必要性を感じた。★自校の歴史を改めて振り返る機会となった。★1日目の最初に行っても良かったのでは。★パワーポイントやDVDを使用することで分かりやすかった。★負の歴史もしっかり見据える必要がある。★ためる教育→使う教育という基本的なコンセプトが参考になった。★創立当初の理念、建学の精神を大切にしたいと思った。★非常に完成度の高いプレゼンテーションで感動した。

3　礼拝（森田喜之牧師）について

★分かりやすくて心にしみた。★もう少しバラエティがあっても良かった。★一貫したテーマ、豊富な例え話で多くを学んだ。★参加者と共に神を賛美できたことに感謝。★牧師は「心の引き出し」?を多く持っていないと務まらないと思った。★いのちを大切にする考え方を教育の現場で活かしたい。★朝夕に静かに祈る時間を持てて良かった。★子ども・生徒との関わりについて考えさせられ反省させられた。★開会・閉会の伊藤先生の話も良かった。★聖歌隊が良かった。★自分と向き合う貴重な時間となった。★何回も聞いた聖書個所なのに「あ、そうだったんだ」と新鮮に感じた。★自分が日頃思っていたことを説き明かしていただいた。

4　分科会について

★異なるテーマで2回あったので多様性の点では良かったが未消化の原因にもなった。★いろいろな人と知り合えて良かった。★各学校の紹介に時間が取られるが情報交換も貴重。★友人をたくさん得ることができた。★テーマは適切であるが、Ⅰ、Ⅱのどちらかをグレード別に行っても良かった。★時間が足りない。★違うグレードからの実践報告に学ぶところがあり有意義だった。★それぞれの立場や状況が違うので同じグレードにした方が良い。★さまざまな学校の試みや事情が聞けて参考になった。★テーマ別選択はおもしろい企画だった。★同じ課題を分かち合うことが早急にでき、成功だと思う。★机上にネームプレートを置くと良い。★時間が短かった。★同じグループで2回話ができればいいそう深められたと思う。

5　分団について

★講演をフィードバックする意味で大切な時間だった。★時間が短い。★分科会とも違うメンバーでよかった。★分科会と同じメンバーでも良かった。★着任間もないものには理解が不足しているので、事前に調べるようにするアナウンスも必要だったかも。★主題講演を聞き流しにしないためにも必要。★創立から現在まで各校が守ってきたもの、守っていくべきものを確認した。★移動に時間がかかった。★他の参加者が講演をどう受け止めているのかが興味深かった。★各校での取り組みが聞けて良かった。

6　全体会について

★森島先生に多くの質問に誠実明確に答えていただいて感謝。★参加できなかった分科会の様子も垣間見られた。★講演の内容をより深く聞くことができた。★グループシェアリングが新鮮で良かった。★グループシェアリングでさらに振り返って先生と話をすることができ自分自身の糧となった。★とても大切な使命を帯びて働かされているという思いを再認した。★グループシェアリングの時間が短かった。★1人の話す時間が長くなってしまいがちなので、タイムキーパーが必要。★後継者育成のコメントが参考になった。★今回この研修会に参加した甲斐があった。

7　コンサート（レインボーミュージックジャパン）について

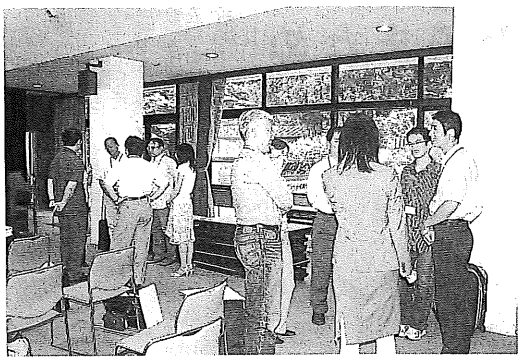
★魂が清められ美しい音楽に触れることができて感謝。★姉弟の賛美活動に感銘した。★気持ちの良い爽やかなひとときだった。★マイクがない方が良かったかも。★伝統的なものも聞きたかった。★歌声に癒された。★ノンクリスチャンにはメッセージ性が少し強すぎる感じもする。★CDは販売した方が良かったのでは?カンパなら事前に知らせてほしかった。

8　プログラムについて

★大変充実していた。★多くの同労者と出会い、お互いを知り合う機会がたくさん与えられた。★適度の休憩ができて良かった。★自己研鑽に繋がった。★フリータイムにはリフレッシュできた。★1泊2日も可能ではないか。★「研究集会」なのでもう少しテーマを深く学び教示してもらえるものだと思っていた。主として新規採用教員のためのプログラムとして考えているならはっきり示してほしい。★朝の体操も工夫があって楽しかった。★立地を活かして富士山を堪能するプログラムもほしい。★積み重ねや深めてゆくことが難しくなってきた。★キリスト教学校で自分がどのようなことを要求されているのか少し明確になった。★もっと具体的なテーマ（脳死や裁判員制度等）のディスカッションを行ったり、ノンクリスチャンの教員を「招く」要素があっても良いと思う。★参加者が新任から課題を持っている人まで様々なので、プログラム作りが難しいかと思う。別々に学べる場があると良い。★分科会は続けると良い。

9　その他

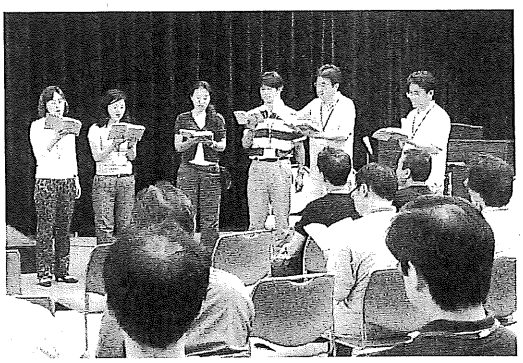
★プログラムの中に分科会・分団の会場を入れてもらうと助かる。★講師・実行委員・事務局に感謝。★1人部屋にしてほしい。★会場をたまには変更して欲しい（少し不便です）。★地方の同盟校で苦労されている現実を互いにシェアしたり報告を聞く機会があると良い。★食事の間隔が短かった。★昨年に比べてテーマの緊迫度は小さかったが話しやすかった。★建物の配置などは予め知らせてほしい。★もっとミッションに立つ面を押し出し、慰め合いではなく、危機感をもっと一人一人が持つべきだと思う。


アイスブレイク（初対面参加者のための）

「歴史」を創る担い手によろ　森田喜之牧師による礼拝

レインボーミュージックジャパンコンサート

分科会の一コマ

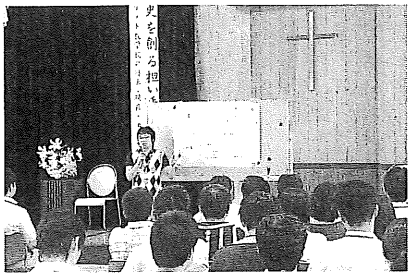

夕拝での聖歌隊奉唱

東西対抗ソフトボール表彰式

第53回事務職員夏期学校

主題＝「キリスト教学校事務職員の新しいアイデンティティーを探る―建学の精神を支える者として―」
日時＝7月25日～27日　会場＝御殿場・東山荘
校長＝平塚敬一氏（同盟常任理事、立教女学院中学校・高等学校校長）
主題講演要旨・礼拝説教は9月号をご覧ください。

3日間のまとめ



時折強い雨の降る天候のもと、御殿場東山荘にて3日間の事務職員夏期学校が始まりました。キリスト教大学に入職して日の浅い職員を中心に、全国から集まってきた参加者は初対面同士少し緊張した面持ちでそれぞれに期待と不安を抱いているようにみえました。今年の夏期学校を、3日間のプログラムにそってご報告します。

1日目
7月25日（土）

開校式では、平塚校長が同じ志をもつ仲間が集いさまざまな思いや意見を本音で語りわかちあい、参加者自身が主役であるという意識で実りある研修会にして欲しいと呼びかけられました。

研修会の冒頭は、主題講演から始まります。夏期学校の校長も務められる平塚講師は、今年プロテスタント宣教150年の記念すべき年であることについて触れられ、日本におけるキリスト教信者が0・9％に過ぎない状況においてなおキリスト教学校が社会の期待を集めていることを特異なことと受けとめ、改めてその存在意義を問い、新たな展望をもつべきときにあると述べられました。キリスト教学校には建学の精神という明確な理念や思想があり、その精神を具体的に社会に伝えていくことで使命を果たし、そのために私たち勤務員がなすべきことについて説かれました。また、勤務員の大多数がキリスト者ではない、キリスト教学校であることを主体的に選択して勤務しているわけではないことについて、すべての勤務員が同じ立場で協働できる場を持つことが大切であるとお話されました。ひらかれた姿勢をもち、一人の人間を大事にする姿勢をもつことこそキリスト教教育である、事務職員のアイデンティティーを探る非常に示唆に富む講演でした。

2日目
7月26日（日）

午前午後を通じてグループ討議を行いました。午前の討議では、主に各学校の建学の精神の紹介を中心に、各校のパンフレットを持ち寄ってさまざまな話がなされました。午後にかけて、討議のテーマである「キリスト教学校職員として、今、私たちにできること」をまずは各自が検討し、検討結果を共有して模造紙に特性要因図を作成するワークを行いました。同じ思いが重なり合い、また異なる視点での意見に心動かされグループでの考えをまとめる作業は活気が溢れておりました。

また、午後の特別講演において、菅原講師は、オウム真理教事件を担当されていた新聞記者経験や自身がキリスト教信者ではないことについて触れ、具体的に宗教科で何を教えているのかについて語られました。宗教教育では、愛や慈悲などをまず説くことが多くみられますが、それは宗教教育の出口の部分であって、入口はまず「疑う」ことだと説かれました。カルトだけではなく、その他宗教も、他者をも徹底的に疑い、世の中一切を疑うと残るのは「絶望」で、絶望の底に射し込むかすかな光に「気づき」、宗教的な「感動」にひたる、そこに永住することなく俗世に「還ってくる」こと。俗世を忘れ感動にひたって終わるのではなく、たとえば周囲に苦しんでいる人がいてそれに気づきそこに愛や慈悲が生まれてくるものだと説きます。入口から出口へ…お話の中で小説や詩を引用される菅原講師の言葉は非常に情感があふれ様々な想像を起こす素晴らしい講演でした。

3日目
7月27日（月）

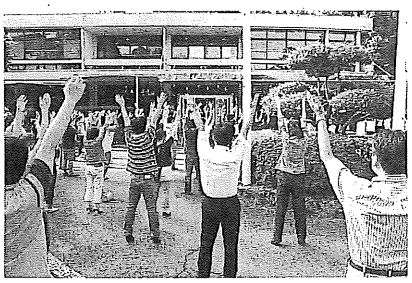
最終日の全体会では、グループ討議にて作成した特性要因図を示し各グループ代表者から討議内容の発表を行いました。意見のまとめ方はそれぞれに特徴があり、その後の質疑応答も活発に行われるなど、非常に主体的に取り組んでいる様子がうかがえました。

3日間を通じ、主日礼拝をはじめ礼拝における大檜牧師の説教はとても力強く、明快な語りで心に響くことばをたくさんいただきました。分からないことの中に光を見出すこと、見えないものに目を注ぐことの大切さはキリスト教学校に勤務する私たちにとって日々を振り返る良い機会となりました。

夏期学校は、日常業務から離れてキリスト教学校の職員であることについて一人ひとり深く考えることのできた貴重な3日間となりました。同じキリスト教大学に入職した職員同士の絆が深まったことと思います。

佐伯美佳
〈立教大学学生部〉

夏期学校に参加して



意義のあった3日間

大野　晶子

7月25日から27日にかけて御殿場・東山荘で行われたキリスト教夏期学校に参加しました。初日から平塚先生の講演を聞きましたが、普段、日々の業務に追われて忘れかけてしまった建学の精神について、改めてその意味を認識させられました。キリスト教学校に従事する者として、学生・社会に対して大学の存在の意味を伝える必要があり、私たちはそれを忘れてはいけないのだという思いを強く持つことが出来ました。

2日目には、「入り口から出口へ」というタイトルで菅原先生の特別講演が行われました。ノンクリスチャンの立場である先生のお話は非常に共感させられました。宗教の信仰というのは、興味のない人間にとっては無関心になりがちです。宗教を信じることは誰でも急に出来ることではありませんが、それに気づくことと気づかせることが大事であるという考え方は、抵抗感なく私の心に響きました。

2日目から最終日に行われたグループ討議では、キリスト学校職員として今私たちが出来ることを考えました。皆がすぐに出来ることなどの意見を出し合い、とてもためになる参考になる意見も出されました。

短い時間ではありましたが、このように集中して真剣に考える機会を与えて頂き、私にとって非常に意義のある3日間でした。一緒に研修に参加した職員の皆様、夏期学校の運営を担当された実行委員の皆様、講師の先生方には本当にお世話になりました。この感想文を通してお礼の言葉を述べさせて頂きます。有り難うございました。

〈西南学院大学言語教育センター〉

気づきの場

青木　麗子

「キリスト教学校の事務職員の新しいアイデンティティーを探る―建学の精神を支える者として―」というテーマで、北は北海道から、南は長崎までの37法人、計100名を超える参加者とともに2泊3日の有意義な時間を過ごした。

この3日間は「気づきの場」であり、勤務校の建学の精神を改めて意識し、キリスト教学校に勤務することの意義を考える貴重な機会であった。

主題講演やグループワーク、全体討論を通して、私たち事務職員は、キリスト教の教えに沿った明確な建学の精神を、教職員、学生、生徒や児童、保護者に浸透させ、そしてそれを社会に伝えていく使命があるということに気づかされた。

この夏期学校では、キリスト教学校で働く仲間同志が寝食をともにし、互いに語り合うことが出来た。また、同年代のクリスチャンの方とお話し出来た貴重な機会だった。大橋先生の説教から言葉を借りれば、私は「たまたまキリスト教学校の職員となった」わけだが、その「たまたま」のおかげでこの機会を得られたことは素晴らしく、そして野本先生のおっしゃった「偶然の出会い」が今後の糧になることだろう。

これを機に、建学の精神を支える者の1人であることを意識し続け、それを伝えるための方法を問い続けていく必要があると感じた。そしてその使命を全うすべく、建学の精神を学校運営に具体的に表し、小さなことからでも少しずつ実践するよう努めていきたい。

最後にこの場を借りて、この機会を与えてくださったすべての皆様、そして出会えた仲間たちへ、心より感謝申し上げます。

〈関東学院大学学長事務室〉

夏期学校で得たもの

黒川　武大

今回の研修は、キリスト教学校職員の在り方を改めて考える有意義な機会となりました。多くの職員の方々との交流を通して、同じキリスト教学校として共通の課題を抱えていることを知り、互いに解決策を出し合い多角的に考察することができました。その中で最も重要な課題は、各学校の建学精神を今日の言葉にかえて児童・生徒・保護者に伝えていくことだと改めて感じました。それぞれ建学精神は違えど、全てはキリスト教の精神に基づくものであり、時代を超えて教育の根幹になるものであると、再認識しました。昨今、経済不安や少子化といった学校教育を取り巻く環境は、非常に厳しいものとなっています。このような状況だからこそ、建学精神を広く伝えていかねばならないのだと思います。

我々事務職員は、様々な場面で児童・生徒・保護者と出会い、学校運営の主要な部分を支えていることを認識し、建学精神を伝えていく責任があるのだと、今回痛感しました。

また、研修に参加できなかった本校職員にもこのことを伝えていくつもりです。それは簡単ではありませんが、その時こそこの研修で同じ課題を共有した他校の方々が助けになるのではないでしょうか。互いに協力し合うことで、学校間に結束が生まれ、さらにはキリスト教学校全体の発展につながっていくと信じています。今後もこのネットワークを大切にし、各学校の更なる連携と発展に活かしていきたいと思います。

最後に、このような場を与えて下さり、ご尽力頂いた方々に感謝致します。

〈青山学院初等部事務室〉

私が今ここに導かれた意味

山田　弘子

私はキリスト教学校で4年間学び、社会に出てそして再び今キリスト教学校で働いています。自身はクリスチャンでもありませんし、学校を選んだ理由に「キリスト教学校である」という点も全く含まれていませんでした。

主題講演において平塚先生がおっしゃった「私学の良い時代は終わった。キリスト教学校なら優秀な学生を輩出する、という社会通念に甘んじて良いのか」という問いかけに対し、そのような社会通念が存在している、という事実に驚きました。

本学への入職の際に強く説かれた「建学の精神」は、一般企業の「企業理念」と同様に捉えていました。しかしよくよく考えてみれば、企業理念に共感する事が入社を志望する動機の1つだと考えると、教職員と同様に学生こそ建学の精神やスクールモットーに賛同する事が、入学を希望する理由の1つと本来なるべきではないかと考えました。クリスチャンではない教職員も含め全教職員がキリスト教学校教職員として同じ1つのベクトルを向く＝アイデンティティを持つ事こそが、各々の学校のいわゆる「私学の危機」を回避でき、且つキリスト教学校で学んだ優秀な学生を輩出する手立てではないかと気付きました。

改めて一職員として私がここで何を成すべきなのか、常に日々心に留めながら業務に励んでおります。

〈宮城学院女子大学学生支援グループ就職担当〉

アンケートから & 見る夏期学校

1　主題について　さわしい。

★日常の勤務ではあまり意識したことがなかったが、今後のキリスト教学校における自らの考え方や取り組むべき事を再認識させられた。★事務室にいる「私たち」がまず何が出来るか、始められるかを考えることができた。★建学の精神を考える良い機会となった。★職員としてのアイデンティティは普段考えないことであり、難しかった。★まずは学校職員のアイデンティティを考え、そこからキリスト教につなげた方がよい。★もっと具体的な主題の方がよい。★時代の流れの中で日本の私学の教育機関としてのミッションを考えるのに有意義だった。★常に問い続けるべき問題である。★「アイデンティティ」の定義が分からない。★キリスト教学校職員としての軸を考えさせられた。★初対面の人と話し合うには適した主題である。★学校内でも取り上げられるべき問題である。★自分の職場に戻って他の職員と共有したい。★創立者の志と精神の原点を未来に新しい形で継承したい。★新人の多いこの研修会にはふさせられた。★キャンドルサービスが厳かで印象的だった。★心を落ち着かせることが出来た。★聖歌隊がすばらしかった。★今後機会があれば礼拝に出てみたい。★自分だけでは気付かない様々な視点を与えてもらった。★型破りな説教が新鮮だった。★キャンドルサービスで地面に座るのが疲れた。★時間が長すぎる感じがする。★キリスト教学校で働くものに強い自覚を求められたように思う。

2　主題講演（平塚敬一氏）について

★キリスト教学校のこれからに何が必要なのか考えさせられた。★具体的にどう動くかよりもその奥にある精神性を考えさせられて興味深かった。★クリスチャンとノン・クリスチャンの共生、相互理解ということが印象的だった。★キリスト教学校と教育同盟の歴史と現状を知ることで主題を更に深めて考えられた。★「あなたがたは地の塩である」の引用で、「ならなければいけない」ではなく「すでになっている」という話に感銘を受けた。「塩加減」を見極めていくように意識して業務に当たりたい。★ポイントを掴みにくかった。★「私たちの学校の創立者は神である」ということばに、参加者との仲間意識をもてた。★私学経営に関して理事会のみならず教員・職員も関わっていることを忘れずにモチベーションを揚げて考えていかなければならない。★学校の危機意識の薄さに気付かされた。★キリスト教学校が昔から同じではなく時代時代で変化していくことが分かった。★建学の精神がクリスチャンだけではなく万人に分かるようにすべきということに共感した。★キリスト教だから良いのではなく、一人一人を大切にするからキリスト教学校が良いとのことばに感銘を受けた。★建学の精神をメディアを使って社会に発信することが大切ということを聞き、その発想に欠けていたことに気付いた。★大きなヒントになった。「私学の危機」を違う角度から意識し直した。★次世代を担う若者を育てる教育の根本的な立て直しがとても重要だと感じた。★キリスト教学校に良好なイメージがあるならば、あるうちに出来ることを考えるべきだ。

3　特別講演（菅原伸郎氏）について

★キリスト教だけにフォーカスを置くのではなく、柔軟な考え方を持つことの大切さを知った。★宗教全般についてという視点だったのが良かった。★「疑う」→「絶望」→「慈悲・愛」というプロセスが新しい発想だった。★「宗教とは信じるものではなく気付くもの」との話はキリスト教学校における非キリスト者の役割を考える上で大きなヒントをもらった。★新しい視点で宗教を考えることができた。★多くの詩や文学が紹介され、人の生き方と宗教の関わりについて考える良いきっかけとなった。★非キリスト者から見たキリスト者を学術的に分析していて新しい切り口だった。★キリスト教一色になりがちな研修に新風を吹き込んでもらった。★何を伝えようとしているのか不明確だった。★主題に相応しい内容だったのか疑問。★時間的に昼食後はつらい。

4　礼拝について（キャンドルサービスを含む）（大橋邦一牧師）

★礼拝に参加する機会が少ないので貴重な体験だった。★説教の内容が普段聞くものと違う点からだったので興味深く考えさせられた。★キャンドルサービスは角的であり、このような会に参加して柔軟な考え方を常に持つ必要性を感じた。★発表された事が本当に実現されれば良い学校になるだろう。新人の私たちがどこまでできるかを考えると限界があるが…。★他のグループの意見が参考になった。★様々な意見が出されたが、根幹は同じだという意識の共有ができた。★先生方の最後のコメントが良かった。★発表は模造紙ではなく、プロジェクターが使えると良い。★日常業務で実践したい内容も多くあった。★いきなりKJ法の課題に取り組むのはハイレベルすぎる。また問題解決手法をKJ法づける理由は？★発表されたことを考えるだけでなく「行動」につなげていくよう努めたい。★夏期学校に集まるものの一体感を感じた。

5　グループ討議について

★多くの意見が出され、建設的な議論が展開して有意義な時間だった。★他の学校の人と話す機会が持ててとても勉強になった。★KJ法は良いが、フィッシュボーンは向いていないような気がする。★フィッシュボーンは問題点や論点をはっきりさせるのにとても有意義だった。★テーマが抽象的で最初の切り口が難しかった。★人数が多すぎて話が弾みにくかった。★実行委員のサポートが良かった。★KJ法や作図方法を理解できない人が多かった。もう少し詳細な説明が必要ではないか。★現場に戻って何が出来るか考えることができた。★討議の時間が短い。

6　全体会について

★同じ職員でも視点は多角的であり、このような会に参加して柔軟な考え方を常に持つ必要性を感じた。★発表された事が本当に実現されれば良い学校になるだろう。新人の私たちがどこまでできるかを考えると限界があるが…。★他のグループの意見が参考になった。★様々な意見が出されたが、根幹は同じだという意識の共有ができた。★先生方の最後のコメントが良かった。★発表は模造紙ではなく、プロジェクターが使えると良い。★日常業務で実践したい内容も多くあった。★いきなりKJ法の課題に取り組むのはハイレベルすぎる。また問題解決手法をKJ法づける理由は？★発表されたことを考えるだけでなく「行動」につなげていくよう努めたい。★夏期学校に集まる多様性に気付いた。★もう少し讃美歌の説明があると良かった。★大勢で歌う良い経験ができた。★ストレス発散になった。★指導に圧倒された。少し強制的。

7　讃美歌を歌おうについて

★讃美歌をたくさん知れて良かった。歌詞の意味も分かった。★もう少し時間があれば良かった。★馴染みのある讃美歌も歌いたかった。★音楽の授業のようだった。★自然と声が出るようになり楽しかった。★讃美歌の説明があると良かった。★大勢で歌う良い経験ができた。★ストレス発散になった。★指導に圧倒された。少し強制的。

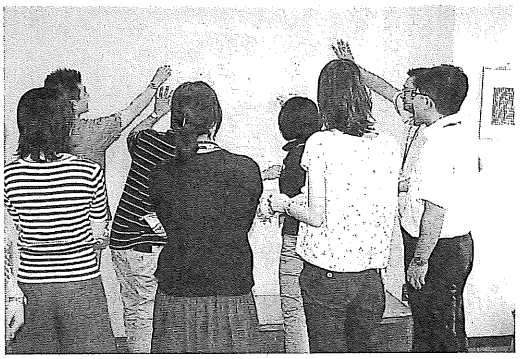
8　プログラム全体について

★よく考えて組まれていると思う。★短期間でも充実して過ごすことができた。★ゆとりのあるプログラムだった。★参加者と同じキリスト教学校の運営に携わっていることを肌で感じることができた。★立食の夕食が良かった。★楽しく過ごせた。★多くの仲間と知り合えることができた。★新人向けの研修会ならばこれで良い。★屋外で身体を動かすプログラムが欲しかった。★自由時間が少なかった。★自分自身と自分の学校を見つめ直す良い機会だった。★大部屋も交流の場には良かった。★1泊2日だともっと参加しやすい。★講師に女性がいてもよかった。★多くのアイデアやヒントをもらった。★キリスト教についてのより入門的な内容も必要だと思う。★会場のレイアウト変更はできるだけ少なくしてほしい。

9　その他

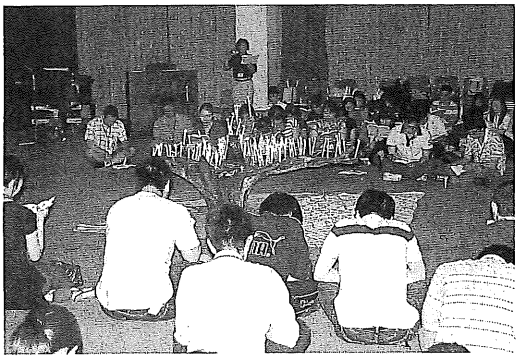
★他校との交わりができて良かった。★講師の先生方・実行委員・事務局に感謝。★持ち物に「名刺」を入れてほしい。★中堅職員の研修会も企画してほしい。★主日礼拝に献金があることとその趣旨を事前に知らせてほしい。★御殿場線は「SUICA」が使えないことを事前の案内に記載してほしい（処理が大変なので）。★部屋はもう少しきれいでせいぜい4人部屋にしてほしい。★写真やアイスクリームの配布など細かな気配りが良かった。

実行委員紹介



グループ別討議

夕食での親睦



キャンドルライトサービス

各地区の夏期行事

西南地区

総主題 歴史を創る担い手になろう

―キリスト教学校の過去・現在・将来を見据えて

第49回新任教師オリエンテーション
第59回夏期学校

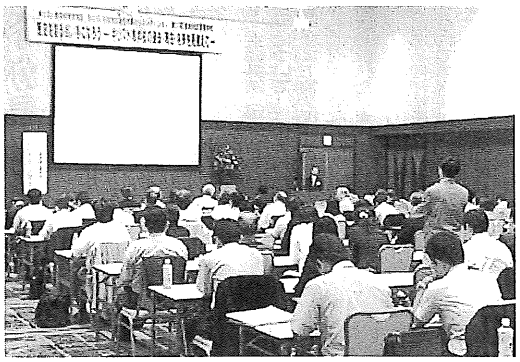
今年の西南地区新任教師オリエンテーションと夏期学校は、8月4日（火）、5日（水）の1泊2日で、北九州市の八幡ロイヤルホテルを会場として行われた。準備当番校は北九州地区3校（梅光学院・西南女学院・折尾愛真学園）であり、折尾愛真学園が主幹校として準備に当たらせていただいた。

第1日目（8月4日）の午前中に、「第49回新任教師オリエンテーション」が行われた。そして新任教師の方々が合流する形で、「第59回夏期学校」が午後開校された。

今年の参加人数は、12法人から過去最多となる104名という方々のご出席をいただいた。新たな法人加盟校、大学学部新設校、小学校開設校より多くの新任教師の方々がご参加下さり、その数は66名となり、この数もこれまでで最も多い新任教師オリエンテーション出席者となった。

全体プログラムは講師お2人による講演（3回）、礼拝（4回）、グループ討議（2回）、グループ討議全体協議報告会、そして夕食懇親会というものであった。新任教師オリエンテーション開会礼拝は「理想の教師・教師の理想」と題し、そして5日の朝の礼拝は「まことの謙遜・まことの誇り」と題してそれぞれ吉井秀人折尾愛真学園学園牧師が、夏期学校開校礼拝は「しかし成長させて下さったのは」と題して西南学院の寺園喜基院長が、閉校礼拝は「生徒はわたしの推薦状」と題して活水学院の野々村昇院長がそれぞれ奨励を行った。

礼拝奏楽担当は折尾愛真高校の小田ひかり・徳増希代子両教諭であった。



夏期学校　大西晴樹氏への質疑

新任教師オリエンテーション

九州学院内村公春院長による「ミッションスクールで働く誇りと喜び」と題する講演をしていただいた。「『ミッションスクール』とは何か？」との導入の話がなされ、キリスト教主義の学校、キリスト教学校とする呼称の変遷の背景が語られた。「キリスト教学校とは、生徒を育てて下さるのは神さまであるということを建前ではなく、本気で学校の中心にどんと据えている学校のこと。教師やその責任者は神さまの働きの協力者である」、「キリスト教学校とは、神を恐れ、隣人を愛することを大切にし、それに心を向ける人格の形成を最も重視する教育を行う学校のことです」との引用文は心に残るものである。「私学であることの意味」においては、建学の精神が具体的に教育に反映されることが大切である。創立者とその精神を共有し、後にその学校の教育に参加する者たちによってその学校の教育が引き継がれていくのも、建学の精神が堅持され、継承されているからとあった。

内村先生はまた、現在の子どもたちが置かれている状況を、

・自分を許れない状況に追いやられている
・便利になり何でもインスタント環境にある
・少子化のため群れない時代となり社会性に乏しい
・情報過多の中で自分自身を見失っている
・道徳はあっても正義・真理・愛についてまじめに考える機会が極めて少なくなってきているのではないか

と描き、現在の教育的課題にもふれて問題提起なさった。最後にキリスト教学校で働くことの誇りと特権そして喜びを知る者として、「卒業生に見る『キリスト教教育の意味』」を具体例をあげてお話しになり、新任教師オリエンテーションにふさわしい示唆と指針に満ちたご講演となった。

夏期学校

明治学院大学大西晴樹学長による2回の講演をいただいた。両講演を貫く重な研究文書・写真資料95枚をパワーポイントで示しながら語られた。

第1回講演は「教育同盟史―国粋と外来の間で―」との演題の下に、キリスト教学校教育同盟の戦前の歴史は、縦糸である日本の国粋仕儀的な教育政策と横糸である海外宣教団体のエキュメニズムという2本の糸の織りなす綾であった。1899年の文部省訓令第12号の発布により、キリスト教学校の男子校において中学校令による中学の廃止、女子校においては各種学校という差別待遇を受けることになった。

他方海外宣教団体によるエキュメニズムはキリスト教大学の設立の機会を提供した。男子大学は教派主義や戦争によって設立に失敗したが、女子大学は各学校の協力の下に成功した。戦前・戦中・のみならず戦後の動向にも触れてお話しになった。

第2回講演の演題を「『キリスト教教育』論争史」として、同盟加盟校の使命である「キリスト教教育」について語り始められた。そしてキリスト教主義学校、キリスト教学校と世俗化の傾向に対抗してその呼称の変遷してきた歴史が語られた。またキリスト教教育の目標、教会（信仰教育）と学校（キリスト教教育）分離が論じられた。

〈折尾愛真学園学園牧師〉　吉井秀人

関西地区

なぜ今の時代に キリスト教主義学校が必要か

第51回夏期研修会

8月3日・4日、京都ガーデンパレスを会場として関西地区夏期研修会が行われた。

今年の夏は標題のテーマを掲げ、西南女学院中学・高等学校校長内山賢次先生に主題講演をしていただいた。実行委員長高木総平先生の開会礼拝で始まり、キリスト教学校の存在意義とは何か、若い人達へどのようにキリスト教を語っていくのか現在の課題であると全体のテーマを絞っていただき、つづいて関西地区代表の関西学院院長ルース・M・グルーベル先生からキリスト教学校が原点に戻って考えていくことが大切であるとのメッセージを受けた。

主題講演では内山先生から「『使命』教育共同体～価値の空洞化に抗して～」と題して次の内容の講演を受けた。

現在は私学、キリスト教学校の独自性は公立の学校でも取り入れられており、私学の独自性はほとんど失われている。ただし公立の学校が踏み込めない領域がある。それは信教の自由で規定された、宗教教育である。これは私学の唯一残された領域と言えるもので、宗教教育を行わないキリスト教学校はキリスト教学校ではない。宗教教育を捨てそれ以外に経営の活路を見いだしたその独自性は一時的で永続性はない。キリスト教学校の宗教教育は人間が人間として聖書の言葉を通じて人間を造るものである。だが、キリスト教学校はかつて第二次世界大戦ではこの教育にダメージを受け、キリスト教を広めるということであればミッションは失敗したのである。時の為政者はキリスト教学校の本質に気がついたから、キリスト教学校をつぶしたのであり、国家権力によって殺されたのである。このことを私たちは忘れているのではないか。「メメントモリ」、イエスの死を思い出す。肉体は一時的、目に見えるものは一時的、目に見えないものに永遠がある。私たちが覚えなければならないのは存在理由があるという生き方である。自己中心の世の中で他己中心を語ることがキリスト教学校の使命であり、神の意志が私たちの間に残っている。私達が預かっているものをいかに用いるかが課題なのである。キリスト教学校は「死に方上手」を継承する学校である。教職員は見えないものを求めて教会へ行くべきではないか。それを求めて教会へ行く。行かなければ、生徒に伝わらない。現在のキリスト教学校は魂を忘れた学校になっているのではないか。

発題者大阪女学院副院長好田豊作先生とフェリス女学院大学准教授梅本直人先生にしていただき、テーマの内容を深めた。

好田先生は校長としての経験や現在の立場から、大阪女学院は戦前ウイルミナ女学校から改名させられたが、「己のごとく隣人を愛せよ」との漢訳聖書の言葉が戦時中でも掲げてられていた事実から、戦中でも大事なものは中心に据えてあった学校であったことが語られた。そして、現在でも教師が全員オールクリスチャンで頑張っていることを挙げて、困難なことはありながらもキリスト教主義を掲げることができることを示していただいた。

梅本先生からは大学の授業経験の中から話をしていただいた。現在の学生は、大人になるのに理想と自分との乖離に苦しんでおり、そこに学生の叫びがある。それはその人の中にいるキリストが苦しんでいるとみることができる。そこには声にならない声があり、聖霊のいぶきがある。教師としてどう接するとき、教師は救済者になってはいけない。まず大切なのは学生が命の危険のない安全な場所を確保することである。教師が救済者になると無力感は深まるだけである。むしろ学生が持っている中にある力を引き出すことが重要である。宗教的知識に接していない学生は科学的知識で考えようとする。真理は自分の外にあり、その真理にあわせて生きようとする。あわせようとするから苦しむ。自分のコンテクストとの中でそれで良いのだと言うことが宗教的真理なのであり、その中で肯定されることがむしろ重要なのである。

講演や発題に対する質問も活発に出た。翌日には分団で協議を行い、現在のキリスト教学校の現状について経営者の立場、現場の教職員の立場から様々な発言や意見が交わされた。権力と言うことでは中国・四国・九州地方では、県の指導で国旗掲揚の圧力を受ける厳しさが語られた。また、多くのキリスト教学校で経営が、そして職場の中でキリスト教主義を貫くことの難しさなど、現代のキリスト教学校をとりまく困難さを覚えさせられた。

ただその中でも、私たちがキリストに依拠して教育の働きをしているかを確認できたことは有益であった。

〈広島女学院中学校・高等学校教諭〉　竹尾竜一

関東地区

キリスト教学校の教師として
第51回新任教師研修会
良き働き、良き交わり
第4回榛名ワークキャンプ

新任教師研修会

関東地区第51回新任教師研修会が、8月6日（木）～8日（土）の日程で、ホテル箱根アカデミーにて実施された。「キリスト教学校の教師として」を主題とし、67名の新任教師が参加した。

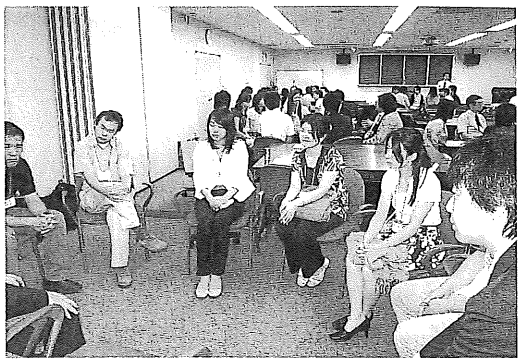
第1日目は、開会礼拝の後、「アイスブレイク」で参加者同士が知り合い心を開く場を持った。そして夕食後に、安達英行先生（清教学園学園長・高等学校校長）の主題講演「キリスト教学校の教師として」が行われた。ヨハネによる福音書9章のイエスの言葉「神の栄光をあらわすため」から、キリスト教教育についての本質的な問いかけをいただき、私たちは常に祈りの中で神と対話し、厳しい現実にも向き合っていかなければならないこと、現代における私学の存在意義、キリスト教学校としての使命について再認識した。

第2日目には、関東学院中学校・高等学校の佐藤洋晴先生、恵泉女学園中学校・高等学校の花岡尚子先生、そして青山学院初等部の古川武治先生から、発題「私の経験」をいただいた。先輩としての力強い励ましの言葉と同時に、キリスト教学校の新任教師が抱くと思われる不安や戸惑いに寄り添う言葉に胸を熱くさせられた。

夕食後は、水口洋運営委員長（玉川聖学院中等部・高等部部長）による問題提起「キリスト教学校に勤める教師に必要なこと」があった。今の子どもたちの現実や文化的状況に対し、キリスト教教育は何をなすべきか。一人ひとりに徹底的に寄り添い、たましいの叫びを聞きとる教育こそがキリスト教教育であると考えさせられた。この日行われた分団協議では忌憚のない意見が交わされ、休憩時間も熱心に語り合う参加者の姿があった。

最終日の全体協議では、各分団による発表でお互いの学びを確認しあった。閉会礼拝では、水口洋委員長からの奨励「賜物を生かして仕えあう」を通し、3日間の恵みに感謝の祈りを捧げ、研修は終了した。キリスト教学校の使命がさらに厳しく問われている時代である。この研修の参加者が、明日を担う存在として生かされていくことを祈る。

〈立教女学院中学校・高等学校教頭〉　山岸悦子

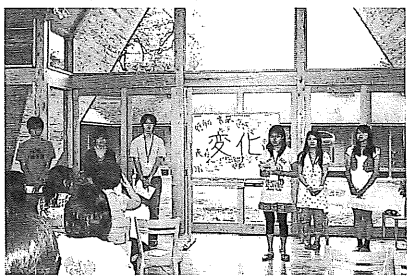


新任教師研修会

☆榛名ワークキャンプ

今年も関東地区中高部会主催の「榛名ワークキャンプ」が8月18日（火）から3泊4日の日程で開催された。キリスト教精神によって建てられ、「キリストの香り」が隅々まで感じられる社会福祉法人新生会（原慶子理事長）の協力による「ボランティアキャンプである。今回で4回目となるワークキャンプだが、今年は8校から18名の参加があり、大変よいキャンプとなった。新生会には11のホームがある。参加した生徒たちはその中の6つの施設に分かれて活動する。1つの施設に3名平均になる。他校とも生徒との協力や交流ができるよう、できるだけ同じ学校の生徒が同じ班に重ならないよう、工夫している。1施設に3名だと、大体1人がひとつのフロアに送られることになる。従って密度の濃いワークになる。

毎年続けて参加する生徒は同じ施設、同じフロアの担当を希望することが多い。それは実質3日間しかないワークであっても、入居者の方々と深い関わりを持てるからなんである。



榛名ワークキャンプ

「帰りたいところ」になるのだろう。生徒たちは「来年また来るからね。それまで元気でね」と入所者の方々に声をかけてワークを終える。

一方生徒同士の関わりでいうと、ほとんどはキャンプで初めて会う者ばかりである。最初はぎこちなく堅苦しい雰囲気だが、3泊4日を過ごす中で、みんながひとつとなり、離れがたい友となる。今年は帰りの電車の中でも、席に余裕があるにもかかわらず、座らずに皆が1ヶ所に集まってずっと過ごしていた。なんともほほえましい光景だった。

過去に参加した生徒からOB・OGキャンプを持ちたいという声が多く聞かれるようになった。そこで来年2010年には初めて榛名ワークOB・OGキャンプを持つ計画である。過去4回榛名キャンプに参加した者が対象で8月16日（月）から18日（水）にキャンプを持ち、高校生キャンプは18日（水）から21日（土）にする予定である。OB・OGキャンプもボランティア寮「心泉の家」に泊まり、OB・OGキャンプの閉会式と、高校生キャンプの開会式を一緒に持とうと考えている。そこで先輩から後輩にこのキャンプの心のバトンが渡されることを期待している。

〈聖学院中学校教諭〉　井本晴雄

東北・北海道地区

2つの講演を通して
地区教育研究集会大学部会

2009年度の東北・北海道地区教育研究集会大学部会は、参加者37名（5大学・法人）により、主題「歴史を創る担い手になろう－キリスト教学校の過去・現在・将来を見据えて－」のもと、9月3日（木）・4日（金）の両日、ホテルメトロポリタン仙台において開催された。

開会礼拝は、佐々木公明氏（尚絅学院大学学長）が、コヘレトの言葉3章12～13節および箴言30章7～8節をテキストに「幸福を求めること」の題で説教を担当した。真の幸福は主の御旨に従った生き方によって実現されるものであり、そのためにもイエス・キリストの教えに基づいた教育が重要であると説かれた。その後、東北・北海道地区の星宮望代表理事（東北学院大学長・学院長）の挨拶、また、当番校の尚絅学院加藤正名理事長・学院長の挨拶が行われた。引き続き、教研中央委員の佐々木哲夫氏（東北学院大学宗教部長）より、私たちに託されている全人格教育という使命を各大学の伝統と歴史を共有しつつ果たして行きたいとの主題解題がなされた。

小林　孝男氏

講演Ⅰは、吉崎泰博氏（宮城学院女子大学学長）の司会で、小林孝男氏（尚絅学院宗教主任）による講演「キリスト教大学のホームページにおける『キリストの香り』に関する考察」が行われた。尚絅学院大学では礼拝堂の建設が懸案事項となっている。参考のため、教育同盟加盟の学校のホームページを閲覧し、礼拝堂設置の現況を調べてみた。その結果、ホームページの様式が実に多様であり、特に、キリスト教学校であることの要素、例えば、聖句や十字架などの掲載も多様であることに気がついた。そこで、独自の物差しを設定し、ホームページに表現されている「キリストの香り」について調査することにした。その結果、キリスト教学校であることのしるしを掲載していたホームページは全体の約75パーセントであった。東北・北海道地区のホームページにおいては、キリスト教関係以外の情報を掲載する傾向があった。

村椿真理氏

引き続き、村椿真理氏（関東学院大学教授）による講演Ⅱ「バプテスト信仰の特質とその教育理念－バプテストの『新生論をめぐって－』」が行われた。その後、小島広二氏（尚絅学院大学総務課長）の司会のもと、夕食において各校の近況が報告された。

2日目は、朝の礼拝から始められた。ヨハネによる福音書1章35～42節をテキストに「来て、見なさい～イエスと苦楽を共にする～」の題で藤井創氏（酪農学園大学教授）が説教を担当した。

2つの講演をめぐって、3分団、第1分団司会斉藤紘一氏（尚絅学院大学教授）、第2分団司会原田善教氏（東北学院大学経済学部長）、第3分団司会大友浩氏（北星学園学園長）において討論が行われた。その後、小島広二氏（尚絅学院大学総務課長）の司会のもと、夕食において各校の近況が報告された。

2日目は、朝の礼拝から始められた。ヨハネによる福音書1章35～42節をテキストに「来て、見なさい～イエスと苦楽を共にする～」の題で藤井創氏（酪農学園大学教授）が説教を担当した。

閉会礼拝は草島豊氏（北星学園大学チャプレン）が担当し、マタイによる福音書12章22～32節をテキストに「大学に働くキリストの霊」との題で説教を行った。キリスト教による人格教育は大学全体を通してなされるものであり、特に、霊的影響がそのための重要な基盤であると説かれた。

最後に、大友浩地区理事（北星学園学園長）より、当番校の尚絅学院と地区事務局の森谷徹氏（東北学院庶務部）に感謝の辞が述べられ閉会となった。来年は北海道地区が担当であり、北星学園の当番校であることが紹介された。研究主題に関しては、来年度の「研究テーマ」を参照すること、また、開催日は9月2日～3日を原案とすることが報告された。

〈東北学院大学宗教部長、東北・北海道地区教研中央委員〉　佐々木哲夫

プテスト派の歴史、特に、贖罪と洗礼に関する相違によって分離したジェネラル・バプテスト派とパティキュラー・バプテスト派（後者は18世紀以降キリストの贖罪の普遍性を受け入れた穏健な福音的カルヴァン主義が主流となる）の歴史的変遷について概観した。新生は恩寵によって賦与されるものであり、その恵みの中に今日の学生たちもまたいることを知らせる使命が教育の中にあると語られた。また、アメリカの南北戦争を契機として、北部バプテスト派と南部バプテスト派に分離したこと、具体的には、関東学院、尚絅学院、捜真女学校、日ノ本学園が前者、また、西南学院が後者の伝統にあることが語られた。

2つの講演をめぐって、3分団、第1分団司会斉藤紘一氏（尚絅学院大学教授）、第2分団司会原田善教氏（東北学院大学経済学部長）、第3分団司会大友浩氏（北星学園学園長）において討論が行われた。その後、小島広二氏（尚絅学院大学総務課長）の司会のもと、夕食において各校の近況が報告された。

2日目は、朝の礼拝から始められた。ヨハネによる福音書1章35～42節をテキストに「来て、見なさい～イエスと苦楽を共にする～」の題で藤井創氏（酪農学園大学教授）が説教を担当した。

閉会礼拝は草島豊氏（北星学園大学チャプレン）が担当し、マタイによる福音書12章22～32節をテキストに「大学に働くキリストの霊」との題で説教を行った。キリスト教による人格教育は大学全体を通してなされるものであり、特に、霊的影響がそのための重要な基盤であると説かれた。

最後に、大友浩地区理事（北星学園学園長）より、当番校の尚絅学院と地区事務局の森谷徹氏（東北学院庶務部）に感謝の辞が述べられ閉会となった。来年は北海道地区が担当であり、北星学園の当番校であることが紹介された。研究主題に関しては、来年度の「研究テーマ」を参照すること、また、開催日は9月2日～3日を原案とすることが報告された。

〈東北学院大学宗教部長、東北・北海道地区教研中央委員〉　佐々木哲夫

全国広報委員会仙台で開催

佐々木哲夫氏による開会礼拝（東北学院）

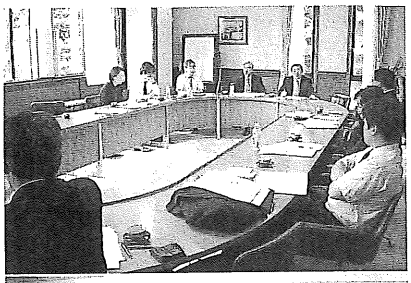
今年度の全国広報委員会が9月11日（金）～12日（土）、仙台で開催され、全国から8名の広報委員が参加した。

まず、東北学院大学土樋キャンパスに集合し、開会礼拝で佐々木哲夫氏（東北学院宗教部長）が「栄光は全地に」と題して奨励され、続いて鈴木齊広報委員長（東洋英和女学院中学部部長）が挨拶をした。その後報告・協議に入り、08年度事業報告・09年度事業計画の確認、前回の全国広報委員会以後発行された広報紙とホームページに対する各地区からの評価・意見を聞いた。

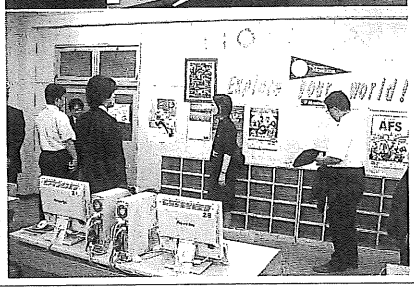
この後、今後の方針について協議し、特に来年は同盟創立100周年を迎えるにあたって広報としてどのような企画が可能か等の意見交換を行い、1日目を終了した。

東北学院大学土樋キャンパスを見学し、夕刻は仙台ホテルに会場を移して仙台地域の加盟校関係者を交えて懇談の時を持ち、広報紙に関する意見をうかがった。

2日目は、2005年に新校舎を竣工した東北学院中学校・高等学校、続いて東北学院大学泉キャンパスをそれぞれ見学した。その後宮城学院に移動して前日の協議を続け、12月号の1面のクリスマス絵画、3月号のアンケートに関して検討した他、例年6月号の座談会を前記のように創立100周年と関連して行い、100周年記念特別企画も含めて多少の増ページも必要となり、実務委員会で検討することになった。昼食後宮城学院（女子大学、中学校・高等学校）を案内していただき、その後尚絅学院中学校・高等学校を訪問し、今回の委員会の全日程を終了した。多大なご協力いただいた関係学校および東北・北海道地区協議会事務局に心から感謝の意を表したい。



宮城学院での協議



尚絅学院中学校・高等学校訪問

2009年度キリスト教文化学会案内

2009年度のキリスト教文化学会大会は、10月30日（金）から31日（土）に恵泉女学園大学（東京都多摩市）を会場に開催されます。主題は「アジアのキリスト教と信教の自由―現代中国のキリスト教の現状と展望―」です。初日は、日本クリスチャンアカデミー関東活動センター所長で、『原典現代中国キリスト教資料集』（新教出版社）の編集者の薛恩峰氏と中国の宗教政策を長年、研究されてきた筑波大学大学院教授土屋英雄氏のお2人に基調講演をお願いしております。お2人のタイトルはそれぞれ「中国キリスト教の過去・現代・未来」、「中国の宗教政策と信教の自由」です。2日目の午前中は「現代中国のキリスト教の現状から何を学ぶか」というタイトルで、初日の講演を踏まえたシンポジウムを行います。シンポジストには薛氏、土屋氏に加え、朝日新聞社編集委員で中国宗教に詳しい清水勝彦氏に加わっていただき、恵泉女学園大学学長木村利人氏のコーディネートで参加者全員による活発な議論と深い学びを願っております。多くの方々の参加をお待ちしております。

本田めぐみ

〈キリスト教文化学会事務局、桜美林学園宗務部キリスト教教育センター〉

図書案内

『現代に活きるキリスト教教育―二十一世紀のキリスト教学校―』（A6判78頁　200円＋税　ドン・ボスコ社）

日本カトリック学校連合会とキリスト教学校教育同盟が協力してキリスト教学校教育懇談会が設けられ、2月に第6回公開シンポジウムが開催された（本紙4月号に記事掲載）が、その記録としてこのたび標記の小冊子が発行された。この冊子には5名の発題要旨と質疑応答が収録されている。

教育同盟では各法人に送付したので教職員・関係者等に回覧していただきたい。なお、バックナンバーを含めた注文書は同盟HPからも取り出せる。冊数による割引有。

キリスト教Q&A

ぶどう

井上進次

Q1　聖書には、よくぶどうが出てきますが、どのような関係があったのでしょうか。

A　聖書に出てくる植物の中で、ぶどうという名は、「ぶどう園」、「ぶどう酒」、「ぶどう畑」、それに「ぶどう酒」も入れると、最も多く見られる植物名です。

ぶどうは、日本人にも馴染みのある植物ですが、旧約聖書の時代でもイスラエルではますますぶどう栽培が広まっていました。その用途は、そのまま果実か干しぶどうとして食用に供するほか、何と言ってもぶどう酒（ワイン）でしょう。各家庭でもワインが醸造され、カナの婚礼にも出てきますが、祭りや宴席には欠かせないものだったようです。

ところで、ぶどう栽培というとぶどう棚を想像しますが、イスラエルでは必ずしもそうではなく、地につるを這わすようにして栽培をしていたようです。旧約聖書では、ぶどうはイスラエル民族を象徴するものでした。詩編80編には「あなたはぶどうの木をエジプトから移し／多くの民を追い出して、これを植えられました」（9節）とあります。イスラエル民族はエジプトから逃れ、カナンの地へ定住し繁栄していきました。そして、「なぜ、あなたはその石垣を破られたのですか。通りかかる人は皆、摘み取っていきます」（13節）とあるように、その後イスラエルという国は衰退し、やがて滅びていきます。

また、イザヤ書5章のぶどう畑の歌に、「……良いぶどうが実るのを待った。しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった」（2節）とありますが、この酸っぱいぶどうも、神に背いたイスラエル民族を指しています。

いずれも、イスラエル民族の辿った歴史を、ぶどうにたとえて表していると言えます。

Q2　では、なぜぶどうがキリスト教のシンボルとなったのですか。

A　イエス様は、ヨハネによる福音書15章で「わたしはまことのぶどうの木、私の父は農夫である」（1節）、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」（5節）と、ご自分をぶどうの木にたとえ、人との関係を語っています。

ぶどうの木というのは、木が建材になるものでなく、見栄えのいい花を咲かすものでもありません。しかし、ぶどうの木は、豊かな実を結ぶものなのです。その意味で、ぶどうはキリスト教のシンボルにふさわしいものと考えられます。

イエス様は最後の晩餐のときに、パンを裂くとともに杯を取り、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」（コリントの信徒への手紙一11章25節）と言われました。私たちは聖餐式において、イエス様の十字架と復活を想い起こしています。ユダヤでは一般的な飲み物として用いられていたぶどう酒ですが、イエス様によって新しい意味が与えられたと考えられます。

〈プール学院中学校・高等学校チャプレン〉

公募

日本カトリック学校連合会とキリスト教学校教育同盟が協力してキリスト教学校教育懇談会が設けられ、2月に第6回公開シンポジウムが開催された（本紙4月号に記事掲載）が、その記録としてこのたび標記の小冊子が発行された。この冊子には5名の発題要旨と質疑応答が収録されている。

教育同盟では各法人に送付したので教職員・関係者等に回覧していただきたい。なお、バックナンバーを含めた注文書は同盟HPからも取り出せる。冊数による割引有。

※採用予定日はいずれも10年4月1日です。

▽茨城キリスト教学園中学校・高等学校
職種＝地歴公民、英語科
常勤講師各2名、国語科、宗教、保健体育科、音楽科常勤講師各1名
応募締切＝10月7日
問合せ＝事務長・川又
☎0294-52-3215

▽桜美林中学校・高等学校
職種＝英語科、数学科専任講師各1名（専任教諭の道有り）
応募締切＝10月9日（英）、23日（数）
問合せ＝事務室長・伊藤
☎042-797-2497

▽清水国際高等学校
職種＝数学科常勤講師1名
期間＝1年間
応募締切＝随時
問合せ＝校長・湯浅
☎054-366-4155

▽同志社中学校
職種＝国語科専任教員1名
応募締切＝11月16日
問合せ＝事務室
☎075-251-4563

▽大阪女学院中学校・高等学校
職種＝英語科専任教員1名
応募締切＝11月16日
問合せ＝法人事務部・佐伯
☎06-6761-4013

▽神戸女学院中学部・高等学部
職種＝英語科専任教諭1名
応募締切＝10月8日
問合せ＝事務長・門田
☎0798-51-8570

▽広島女学院中学校・高等学校
職種＝美術科専任教諭又は常勤講師1名
応募締切＝10月9日
問合せ＝事務室
☎082-228-4131

▽関西学院初等部
職種＝契約教員若干名
期間＝1年間
応募締切＝10月30日
問合せ＝田中、伊藤
☎0797-81-5500

▽神戸松蔭女子学院大学
職種＝聖歌隊指導者1名
期間＝2年間。1期に限り更新の場合有り
応募締切＝11月14日
問合せ＝宗教センター
FAX 078-882-6124

〈総会・研究集会等予定〉
（＊印は同盟HPより開催要項、参加申込書を取り出せます）
10／2　第1回教研事務職員部会研究集会＊　青山学院
10、20　第4回（第42回中高）全国聖書科研究集会＊　敬和学園高等学校　ホテル泉質
11／13　教研小・中高代表者懇談会＊　青山学院大学
14　第52回学校代表者協議会＊　玉川聖学院
3／29～31　第51回中高研究集会　山形学院高等学校

〈9月の委員会・会議等〉
9／4　第4回常任理事会
4　教研事務職員部会委員会　青山学院大学
5　第1回教研中央委員会　青山学院大学
5　教研教職員後継者養成部会委員会　青山学院大学
10　広報QA執筆担当者会議　プール学院中学校・高等学校
11、12　全国広報委員会　東北学院、仙台ホテル、宮城学院
15　教研小学部会委員会　青学会館校友会室
21、22　『百年史』編纂委員会　明治学院大学（白金）
24　第27回キリスト教学校教育懇談会委員会　アルカディア市ヶ谷
30　創立百周年記念事業実行実務委員会　立教女学院

※各地区協議会主催の行事は総会のみ掲載します。その他の地区行事等は同盟ホームページの各地区協議会をご覧ください

編集後記

前号と共に東山荘の夏期行事報告を掲載した。同盟最大の伝統行事で、キリスト教教育の研修と情報交換の時であるが、近年は大学の授業期間で、また地区協議会の夏期行事との関係で開催時期の検討が必要になった。創立百周年を迎える同盟を取り巻く環境は急速に変化している。

政権交代により教育行政がどのように変化するか、注視してゆくことになる。

（花島）